



Photo by Sumiko Yamada/P22参照

人と自然が響き合う

後志



「しりべし」の名が初めて書物に登場するのは、なんと日本書紀。阿倍比羅夫（あべのひろお）によって「後方羊蹄」に郡領（後志）が置かれたとされる。諸説あるが、現在の後志こそが、その地に当たらしい。「後方羊蹄山」「尻別川」「比羅夫」などの地名に、その名残がある。

明治時代に入り、「後方羊蹄」の語音をとって「後志国」となった。名付け親は、幕末の探検家、松浦武四郎だ。

武四郎は6回にわたる蝦夷地踏査のうち、そのほとんどで後志に立ち寄り、この地を北海道行政の中心に据えることを夢見ていたという。

気高き山々と清麗たる水の流れ、そして紺碧の海。

比羅夫や武四郎が夢を抱いた地では今、美しい自然と人間が絶妙に解け合い、眩いばかりの魅力が輝いている。

しりべしやま

後方羊蹄山の 懐で

後志には、多くの人々を魅了し、
地域の象徴と言っても過言ではない名峰がある。
後方羊蹄山。
その懐に暮らす人々は、この山に何を想うのか。

早朝、羊蹄山頂にて。足下の雲海と頭上の雲が朝日に照らされ、一面が白く輝く。
Photo by Yoshiaki Maezawa



8:00 / 登山道入り口で入山届けに名前を記入し、いざ出発。→ 9:00 / 2合目付近にある風穴。かすかに風が流れ、まるで山が呼吸しているよう。→ 10:00 / 2合分登ることに休憩。「後ろにあるの。ウルシだから気をつけて!」→ 11:00 / 6合目と7合目の間にあるダケカンパ。まるでタコの足のよう、四方八方へウネウネと伸びる枝ぶりが「タコガンピ」と呼ばれる。→ 13:00 / 避難小屋までもう少し。8合目を越えるとまだ雪渓が残っていた。→ 13:30 / 旧小屋は間もなく取り壊されたため、新旧の小屋が並んで見られるのは今だけ。小屋に通じる分岐にある鐘を鳴らして「来ましたよ」の合図。小屋の利用料は1人1泊1,000円(税込)。→ 16:00 / 小屋の近くに流れる雪渓水で水を調達。登山ならではの! → 19:00 / 僕の晩ご飯。雪渓水で作ったインスタントラーメンに、古市さんがおすそ分けしてくれたかき揚げをトッピング。うまかった! → 6:00 / 「羊蹄山に育つエゾノツガザクラは、固有性が守られているため他の山に比べて色が濃いです」と古市さんが教えてくれた。→ 6:30 / ついに山頂に到達! 古市さんと記念にパチリ。

皆 この山を「羊蹄山(ようていざん)」と呼ぶ。だが地図をよく見てほしい。「後方羊蹄山」と書かれているはずだ。「こうほうようていざん」ではなく「しりべしやま」と読む。由来は、なんと日本書紀にまで遡る。斉明5(659)年、蝦夷討伐に赴いた阿倍比羅夫が「後方羊蹄に郡領(役所)を置いた」という旨の記述があるのだ。後志総合振興局のHPによると、後方が「しりべし」羊蹄を「し」と読む。羊蹄は「ギンギン」という植物の漢名で、単に「し」と読む字を当てた和名なのだ。現在においてもこの「後方羊蹄」が正確にどこを指すのかは不明なのだが、江戸時代の探検家・松浦武四郎により、アイヌ語で「シリ・ベツ」(山の・川)の意と呼ばれていた尻別川流域がそ

登る。

後方羊蹄山

しりべしやま

「蝦夷富士」とも称される、後志の象徴・羊蹄山。本家フジヤマに負けず劣らぬ羊蹄の魅力、編集長の特命を受け、本誌編集部・本間が体当たり取材を敢行。なんと、ホントに登っちゃいました!

取材・文/総合商研(本間崇)
撮影/総合商研(前澤良彰、本間崇)

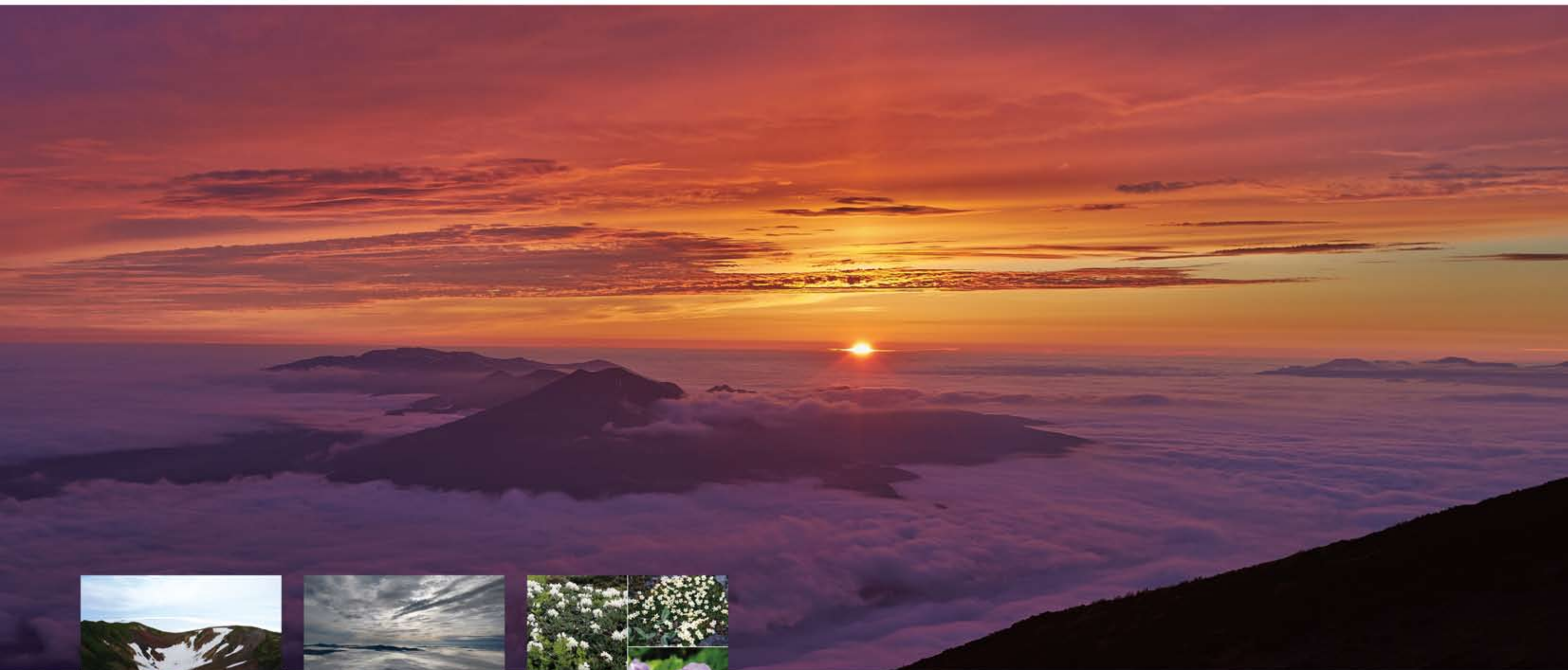


後方羊蹄山(羊蹄山) / 標高1,898mの成層火山。日本百名山の一つに選定されている。毎年6月中旬に山開きが行われ、10月まで高山植物や紅葉が楽しめる。支笏洞新国立公園に属し、山麓全域が保護地域、6合目以上と倶知安コースの登山道が特別保護地区に指定され、天然記念物として動植物が厳重に保護されている。

山では低体温症が一番の大敵。ウェアは速乾性のものを選び、綿製品はNG。雨具、水、食料や上着などを30〜45L程度のザックに。ほか、登山靴や帽子、軍手などを準備。

ガイドの古市さん 本誌編集部・本間

「登」山ブームだし、富士山の世界文化遺産登録にあやかっ、『蝦夷富士』と称えられる後志の象徴・羊蹄山の魅力を、余すところなく取材してください。もちろん登ってね!」6月初旬、編集長から突然の特命が下された。登山なんて超初心者。山登りは学生時代に札幌の円山に遠足気分で行ったきりだ。そんな僕になぜ編集長はこんな無茶振りをして!と動揺を抱えつつ、僕は羊蹄登山へ向け準備を進めることとなった。初心者でも行けるのか? 羊蹄山って。ネットで調べてみたところ、登りだけでなんと5時間もかかるの。情報。こりゃいかん、やっぱり素人一人じゃ無理! というわけで、今号の取材でお世話になっている倶知安風土館の岡崎館長に助けを求めた。「確かにハイキング気分で行ける山じゃないですね(笑)」と岡崎館長が紹介してくれたのは、「マウンテンガイドコヨーテ」の登山ガイド、古市竜太さん。羊蹄山を中心に全道の山をガイドする熟練の登山ガイドだ。「しっかり装備を整え、無理のない行程で臨めば、決して危



一番大きな噴火口「お鉢」(通称「お鉢」)。



山頂から札幌方面を望む。



左/キバナシャクナゲ、右上/イワウメ、右下/シラネアオイ

避難小屋から望む羊蹄山の夕日。ニセコ連山や、日本海から続く一面の雲を鮮やかに染めた。

の地であると推測され、この地域を「後志国」、アイヌ語で「マツカリ・ヌプリ」と呼ばれていた山を「後方羊蹄山」と名付けた。ちなみに松浦さん、自分を阿倍比羅夫の末裔だと信じていたらしく、蝦夷地踏査のたびに後志へ立ち寄り、後方羊蹄山登頂を試みたり、尻別川を下ったりして、後志を蝦夷地行政の中心地にする夢を描いていた。幕府へ献上した報告書とは別に、独自に「後方羊蹄日誌」を残したのは有名な話。それほどまでに「LOVE後志」だった松浦さんだが、後の研究によると、どうやら後方羊蹄山の頂へは到達できなかったようである。

登

山道の風景は登ることに変化を見せ、道中飽きることはない。1合目にかけではシナノキ、アカイタヤにトドマツ、エゾマツの混じる美しい針広混合林を抜け、それ以降は山肌張り付くように斜度を増す。しばらくはエゾマツやダケカンバなど亜高山の幻想的な森が続き、次第に樹高が低くなりハイマツが道を覆い始める。シラネアオイやミヤマキンバイといった花々も姿を見せ、目を楽しませてくれる。

羊蹄山は約6千〜8千年前に最後の噴火があったと考えられる若い山のため、植物に近縁種がないので交雑が起こらず、種の特徴がより明瞭なのだそう。

この噴火は、羊蹄山で人気の湧水にも関係している。全部で17カ所あるといわれる羊蹄周辺の湧水の大半が山の南東側に集中しているのは、数回くり返した噴火のためらしい。周辺町村は1日8万トンもの量を湛える湧水を生活用水や農業用水として利用し、その恩恵を受ける。

羊蹄周辺の農産物や加工食品が美味しいと評判なのも、羊蹄山のおかげなのだ。

ハイマツのアーチを抜け、キバナシャクナゲが咲き乱れる道を通って、避難小屋へたどり着いた。これまで40年近く活躍してきた小屋の隣に、真新しい新小屋が昨春秋に完成している。6〜10月のシーズンの間、小屋には管理人が常駐している。約1週間交代で2人が担当。この日は、倶知安登山口のすぐそばで「蝦夷富士小屋」という営業小屋と食堂を営んでいる近藤英輝さんが番をしていた。

「山小屋の親父をやってみた

コラム

「キツネと共存する羊蹄山麓のまちづくり」

尻別川流域 8 カ町村の心意気

住民主体によるエキノコックス対策活動

取材・文・撮影／碧風舎（坂田 潤一）

現 在 道内のキツネのほぼ半数が寄生虫に感染し、稀ではあるが、犬や猫からも検出されている。羊蹄山麓地域の町村では、住民が行動を起こし、今では行政も一緒になって、キツネの習性を利用した駆除の取り組みを行っている。その効果は確実に現れており、実施地域でのキツネの排泄物からはエキノコックスの虫卵がほぼ検出されなくなった。これは地域の住民や自然環境における安全性に繋がり、また、信頼というブランドになる。

エキノコックスは本来北海道にいなかった寄生虫だが、戦争直後に道東に入り込む。当初は道東に分布が限られていたが、昭和60年代になると道北から道南にまで拡大し、平成に入ると、全道で確認されるに至った。分布が急激に拡大した理由として、



捕殺によるキツネ駆除の方法が指摘されている。つまり、キツネを駆除するとナワバリが空き、他からキツネが入り込みやすくなる。それがキツネの移動を促し、結果、エキノコックスが広がった可能性が高い。

倶知安風土館館長の岡崎 毅さんにお話を伺った。

「ここではキツネ自体を駆除するのではなく、キツネのお腹からエキノコックスをいなくしてしまうという方法をとっています。キツネも北海道に暮らす大切な仲間ですから、むやみに殺すことはしません。簡単に言うと、キツネの習性を利用して虫下しを飲ませる。虫下しの成分が入っているベイト（餌）を定期的に散布し、それを食べてもらいキツネのお腹の中の成虫を下してしまふんです」。

このキツネを殺さないということが実に効果的だ。キツネが生きていることによりナワバリが維持され、他の地域から侵入しづらくなるわけだ。

だが、問題点もあるという。「いくらナワバリがあるといってもエキノコックスに感染しているキツネが遠く地域から入ってくる可能性は否定できません。また、エキノコックスを絶滅さ

「エキノコックスの寄生サイクル」



ベイトは、カマボコに虫下し成分をまぜてつく。キツネのお腹の中のエキノコックスが全て駆除される。

成虫がキツネの腸に寄生して卵を産み、それが糞と一緒に排泄され、野ネズミがこの卵を食べると、体の中で孵って幼虫となり、肝臓に寄生する。この野ネズミをキツネが食べると、キツネの腸の中で幼虫が成虫になる。このように、エキノコックスは、通常、キツネと野ネズミの間の「食べる」「食べられる」という関係の中にライフサイクルをもっている。



館長（学芸員） 岡崎 毅さん
1958年、和歌山県生まれ。2001年より現職。水生昆虫の分類がライフワーク。趣味は古オートバイの分解修理。

倶知安風土館
倶知安町北6条東7丁目
TEL.0136-22-6631



登山記念に、避難小屋で販売している羊蹄山登山記念バッジ（1個700円・税込）を購入。倶知安町役場でも売っているが、せっかくなら登った先で買いたいものだ。

山を囲んでいた雲海も下山の頃には徐々に晴れ、雲の切れ間からは眼下にニセコや倶知安の町並みが見下ろせた。古市さん曰く「山の事故は、8割が下りで起こります」。下りの方が足には負担が大きい。登りで疲れた足は、踏み外してぐじたり、滑って転倒したり、ひどいときには滑落の危険もある。「だから、登山口に着くまで気を抜かないでください。家に着くまでが満足です（笑）」。

楽しい思い出のまま帰宅することが大切。だから、装備と歩くペースが重要になる。雨具はもちろんのこと、防寒対策は必須。羊蹄山は水がないので水分は十分持っていくこと。一歩一歩ゆっくりと、体力を残すように落ち着いて登ること。そうすれば、僕のような初心者でも羊蹄山は十分登頂可能な山だ。編集長、今度は一緒にどうですか？

登った後は… 下る、後方羊蹄山。

写真家

山田 スミ子さん

SUMIKO YAMADA

ニセコ町在住。昭和23(1948)年占冠村出身。2008年まで道職員として35年間勤務。その傍ら1997年頃より写真家中山浩樹氏に指導を受けニセコ周辺を中心に風景写真の撮影を続ける。



撮る。

しりべしやま
後方羊蹄山

登山ファンにはもちろんのこと、その美しい山容から、フォトグラファーにも人気の羊蹄山。被写体としての魅力や撮影テクニックを、地元・ニセコの写真家に伺った。

取材・文／碧風舎（坂田潤二）



3 羊蹄山と兄弟のサクランボの木
2007/3/24 6:30AM 撮影 +0.5 Fuji100F



2 芝桜と羊蹄山
2014/5/31 12:46PM 撮影 1/30秒 F19.0 +0.5 ISO100



1 雲と羊蹄山
2013/9/10 10:05AM 撮影 1/45秒 F19.0 +0.5 ISO100

羊蹄山は第二の故郷

「このニセコ周辺はすべてがやさしいんです」。
山田さんは微笑みながらやさしく話してくれた。
「例えば春の野に咲くカタクリの花。それが他の地区のものとは違って淡い色でやさしいんですよ……」。

山田さんの写真を観ていると、やさしいものをよりやさしく表現し、観る者の心を癒してくれる。また、どのショットも主役が主役として際立ち、いつもの風景だとしても山田さんが撮影すると、とたんに別世界が現れてくる。

ニセコを中心に撮影活動をされている写真家・山田スミ子さんに羊蹄山のビューポイントや撮影に関して話を伺った。

「尻別川流域の町村、町民にとって羊蹄山はとてもシンボリックな存在です。喜茂別、留寿都、真狩、京極、倶知安、ニセコ、蘭越と360度どの町からその頂を確認でき、観る位置、角度によって山の形が違います。それぞれに趣があり、それぞれ大好きなんです。特に私のお気に入りにはニセコ、蘭越

側から眺めた角度の羊蹄山。頂上の火口が見えている側です。あの火口がアクセントになり、力強さが増幅されます。職場までの通勤で毎日観ていた角度でもありますし、そういったことから羊蹄山は私の第二の故郷のような大きな存在になっています。好きな季節は冬。雪に覆われて真っ白になった羊蹄山の大きなキャンパスは刻々と色を変えます。時には吹雪などで大きな迫力で迫ってきますし、時にはそっと包み込んでくれるようなやさしさにあふれていることもあります。あまりにも好きすぎて吹雪の中でも平気で撮影に出かけてしまうんです（笑）。

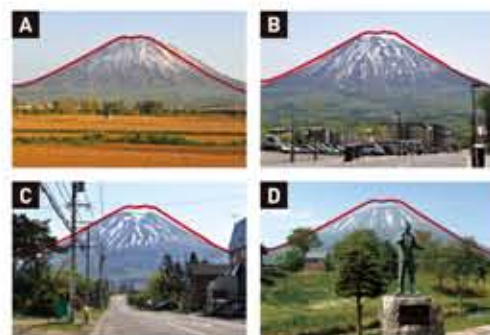
羊蹄山を撮影する際は、山自体に存在感があるため、羊蹄山を撮る、という意識より、他のものをメインにし、背後に羊蹄山がさり気なくもしくかりと入っている、という構図がバランスも良くお勧めだそう。また、陽の角度も、順光には順光の、逆光には逆光の美しさがあるが、斜光はシルエットが浮かび上がりながらさらに立体感が出るので、時間帯を考えて撮影地を選ぶことが大切というアドバイスをいただいた。

緊急検証!

「蝦夷富士」と呼ばれる羊蹄山。
どこから見るのが一番「富士」か!?

羊蹄山。後志の大地に裾野を広げるその雄大な山容は「蝦夷富士」とも称えられ、大きな魅力のひとつともなっている。全国各地に「〇〇富士」は多数あれど、同じ独立峰として羊蹄山ほど富士の名が似合う山もないだろう。そこでふと思った編集部。「いったいどの方向から見る羊蹄山が、一番「富士山」に近いのか?」この疑問を解明すべく、取材中に集めた資料をもとに徹底検証!果たして「ベスト・オブ・蝦夷富士」はどこ?

ベスト オブ 蝦夷富士 候補



A/羊蹄山の真北に位置する倶知安町八幡から。悪くないが、やや山頂右側が崩れている。 B/こちらは東側にあたるヒラフスキーエリアからの眺め。山頂付近がデコボコし過ぎ。 C/ニセコ町市街地のその名も「富士見」地区からの羊蹄山。こちらも山頂のラインが... D/真南にある真狩村の「細川たかし記念像」から。左の稜線が直線的に山頂とつながっている。

富士山に最も似て見えるのは、
「喜茂別2号橋」からの羊蹄山!

検証結果
(ゼロワン調べ)



富士山は左の山腹に少しふくらみが見えるが、羊蹄山はそのふくらみが右に見える点が唯一の違い。それ以外はほぼ完璧に富士山をコピー!

喜茂別町喜茂別

国道230号から道道696号を喜茂別町役場方面へ曲がり約450m直進後左折。喜茂別川にかかる橋が喜茂別2号橋。

※このページの記事はあくまでも JPO1編集部の独自調査によるものです。

山田さんに訊く! 撮影ノ心得 三か条

- その1 時間に余裕を持って行動する。シャッターチャンスを逃さない。
- その2 手ブレを防止すること。三脚はもちろん、ISO感度の調整。
- その3 広角系レンズで構図を考える。背景にも気を使うこと。



山田さんはニセコ周辺での風景撮影の講習会も開催している。上手に撮るためのコツをいくつか教えていただいた。

「時間に余裕を持って行動すること。可能なら前日に撮影現場の下見をしておきましょう。事前に現場の状況を把握していると、準備もしやすくシャッターチャンス逃しにくくなるという理由だ。

「次に、手ブレ厳禁。三脚使用はもちろん、ない場合は自身が三脚になり、ISO感度を上げてシャッタースピードを速くすることでブレを回避できます。そして、広角レンズで構図を考



えてみましょう。背景に必要なない写り込みは注意。同時にボケ味を絞りで調整しましょう。立体感や遠近感が得られます。」

以上の点に注意すれば、これであなとも名フォトグラファー。カメラ片手にフィールドへ出かけましょう!

受講生さんたちと一緒にニセコ町を中心に後志管内を回りながら和気あいあいと講習会が行われる。

山田ミ子・撮影ツアーガイド
photo tour guide

お申し込み・お問い合わせ TEL.090-9435-2208
メール/ yamada.sumiko@gray.plala.or.jp

ビューポイントMAP

山田さんに前ページの3枚の撮影場所を教えていただいた。マナーとモラルを守って絶景の撮影を楽しもう!

- 1 雲と羊蹄山
撮影場所...喜茂別町比羅岡(原校、羊蹄小学校)先の農道入り口
「夏の羊蹄山」をダイナミックな雲が盛り上げてくれました。
- 2 芝桜と羊蹄山
撮影場所...倶知安町字旭 52(二世古酒造奥)
久しぶりの青空と雲に支えられ、華やかな「倶知安の芝桜」を披露する事ができました。
- 3 羊蹄山とサクラランボの木
撮影場所...ニセコ町字蟹我(ホテルヒルトンの下側)
「真上からの太陽と羊蹄山」を中心に硬雪に反射するキラキラとした光と影を意識しながらの1枚。





イトウ

絶滅危惧種に指定されている国内最大の淡水魚。大きな個体になると1mを優に超え、体重も20kgを超す。かつては本州にも生息していたイトウだが、開発などの影響で生息場所が失われ現在ではここ尻別川が生息地の南限となっている。それは国内の南限というだけでなく、世界の中でもこの尻別川が最南端であるということだ。



1/ 地元の小学生にイトウや尻別川の自然のことを説明する草魚会長。「みんなが大きくなるころには、尻別川にはたくさんのイトウが泳いでいるよ」 2/ イトウが産卵のために尻別川支流を遡上する際に障害となる人工堆積物である落差工。オビラメの会は落差工の機能を低下させずにイトウが遡上できるように魚道になる切り崩しの設置を要望。そして北海道は受け入れて魚道を新設した。このことにより、上流域にあるイトウの産卵地まで無事に遡上することができるようになった。 3/ 片山ニセコ町長(右)、福島県知安町長(中央)もイトウの産卵遡上を視察に訪れた。後日、「次世代の子どもたちに(より良い)環境をひきわたすことを一番に考えてイトウの保護に関わっていきたくて考えています」と片山町長。また、福島町長も「自然の宝物を発見したような感じがしています。保護に向けて、できるだけお手伝いしていきたいと思っています」と語った。



清流日本一の尻別川
「尻別川」……後志の中央あたりを東から西へ、羊蹄山を跨ぐように日本海へ注ぐ一級河川。国立公園や国定公園に指定されている山々から集まる支流群も豊富で、清流日本一に幾度も選定されている。
1市6町2村を縫うように流れる尻別川流域には約3万7千人が暮らしているが、その恵まれた水や肥沃な土地をもとに水田や畑作といった一次産業が地域の主力産業となっている。
また、秀峰羊蹄山をはじめニセコアンヌプリなどの連峰があり、温泉や観光、スキーやラフティングといったアウトドア系のリゾート地として、国内のみならず世界的にも認識されている。
尻別川の大きな特徴とも象徴とも言えるのがやはり羊蹄山という名峰の存在だ。
羊蹄山麓に降り注いだ雨や雪は、羊蹄山という巨大な濾過器を通じて湧水となり尻別川に流れ込む。湧水は夏冷たく、冬温かく、そしてミネラルが豊富だ。当然のようにその周辺にあらゆる恵みをもたらし、動植物たちの憩いの地となる。

もちろん、尻別川自体にも数多くの魚類が生息し、その資源量も豊富である。その中にあって、この尻別川にはたいへん貴重なマスが2種生息し、それらの南限となっている。一つは冷水域にその生息域をもつオシロココマ。もう一つが幻の魚と呼ばれている、あの、イトウである。
姿を消した巨大魚、イトウ
昭和50年代、巨大イトウ釣りの聖地であったここ尻別川でも、その姿がほとんど見られなくなっていた。何年もの間イトウが釣れたという話すら聞かれない。すでに絶滅してしまっているのではないのか、否、たえ生息しているも風前の灯であり、このままでは本当に絶滅してしまうのではないかと……絶望に近い話ばかりが飛び交う。
そのような中で、ここ尻別川だからこそ、という活動が地元の民間団体によって行われている。それは、「尻別川の未来を考える・オビラメの会」によるイトウ保護活動である。
京極町在住の伝説のイトウ釣り士であり、「オビラメの会」

尻別川の珠玉

南限の巨大魚を護る

120cm・20kgオーバーの半身を鮮やかな朱に染め、メスを奪い合い死闘を繰り返すオスのイトウたち。羊蹄山の麓、尻別川では、春になると繰り返されるまさに珠玉の光景……。ここにはそれを観護る後志人たちがいる。

取材・文・撮影／碧風舎(坂田 潤一)

尻別のイトウはもう、幻などではない。

ようになりまして、天然イトウの産卵行動の保護もうまくいっています。尻別川のイトウは、もう「幻」ではありません。オビラメの会は、絶滅の危機に瀕していた尻別川のイトウという地域個体群の遺伝子を守りながら復元させる手法を見事に確立するに至った。これは世界初のことで、国内外のイトウに携わる者からも注目されている。もちろん尻別川流域の住民の方々の協力をはじめ、自治体や北海道も協力して実現できたことである。

「計画が終了予定の15年後、私は丁度百歳ですが、尻別川にイトウがたくさん泳いでいる姿をみて、笑顔で会を解散させるつもりです（笑）」。

尻別川の畔には、イトウから「幻」という冠を取り払うべく奮闘している後志人たちがいる。

会長である草島清作さんにお話を聞いた。

「昭和30年頃の尻別川は2百瀬2百淵あると言っていました。イトウのポイントはその無数にあり、川の両岸は分厚い原生林に覆われて、激しく蛇行し深みが多くて、水の中を歩くこともできないため、移動するには本当に苦労したものです。イトウはいくらでも釣れました。1メートルぐらいのものが日に数本釣れることも珍しくありませんでした。それが年々を境にどんどん川が整備されはじめ、イトウの姿もなかなか見れなくなりました。平成に入ると、もうイトウはいなくなってしまったのではないかと、思うくらいになりました」。

誰よりもいち早くそのことに気づき、憂い、行動を起こしたのが草島さんだ。そして多くの仲間を声をかけ、96年に「オビラメの会」を発足させる。

オビラメ復活30年計画

護を目的とした集まりです。30年で激変した自然環境、激減したイトウを、30年かけて回復させようと活動しています。イトウは道東や道北にも生息しています。その地域からイトウを持ってきて尻別川に放流すれば済む問題と言う人もいますが、それは全くもって違います。同じ種ですが、同じイトウではありません」。

イトウと長年対峙してきた草島さんは、川によって生態が微妙に違うと指摘する。「同じ種でも川によって遺伝的形質に違いがある場合もあって、交雑することによってそれが良くない方になると最悪は全滅です。それに、尻別川のイトウは尻別川のイトウでなければならぬんです。そこが重要な部分なんです」。

オビラメの会は尻別川のイトウ自体を保護するのはもちろん、尻別川のイトウというオリジナルも同時に保護するべく活動している。それは生物化学的なことからとても意義があり重要なことである。

「いま、30年計画活動を始め、15年が経ちますが、尻別川で捕獲したイトウのペアから人工授精で育て放流した稚魚達が親魚となり、戻ってきて産卵する



1 人工授精放流した個体(鮭切除標識放流)が8年後に親魚となって放流された河川へ戻ってきたこの後無事に産卵し、稚魚も確認。オビラメの会は、絶滅に瀕していた尻別川のイトウという個体群の遺伝子を守りながら復元させる手法を確立した。(撮影/藤原弘昭) 2 尻別川で釣り上げた個体を釣り人から提供してもらい、飼育し、人工的に受精する。それで得られた稚魚を放流する。尻別のイトウは尻別のイトウでなければならぬ。3 天然イトウから生まれたイトウの稚魚たち。力強く泳ぐ。10年後、親たちと同じ大きさになって、ここへ卵を産みに戻って来い！



くさじま せいさく
草島 清作さん

昭和4(1929)年7月31日生まれ。京極町在住。イトウをこよなく愛するイトウ釣り名人。1m以上のイトウを1,000尾近く釣り上げている。「尻別川の未来を考える・オビラメの会」会長。

尻別川の未来を考える オビラメの会

事務局 吉岡俊彦(まぐろ屋十割)
ニセコ町富士見65
TEL/FAX. 0136-44-2472

